



第九話 尾ナシの話

夏も終わりに近づいたある月夜、私は湖畔でテント泊をすることにした。そこで午後重い荷物を担いで秘密の湖に行った。なかなしく重たかったのが、ボラ親父が所望したので買っていった日本酒一升瓶だ。

日が暮れてポートで月見酒をしているとボラ親父が現れたので、その口に清酒を注いでやった。親父は結構いける口で、飲むと陽気になり、自分の自慢話をあれこれ聞かせてくれた。ボラはそもそも海水魚だが、いかにしてこの淡水湖にいることとなったかが興味深い。

まだ小魚だったころ、竜巻によってすさまじい勢いで空中高く吸い上げられ、あっというまに冷凍され、意識がなくなった。気がつくところの湖で泳いでいたという。要するに冷凍航空便で海から湖に直送されたわけだ。竜巻によって空中に吸い上げられた魚が地上に落下することは知られている現象であるが、運よく湖水に落ちたぼら親父は生き延びたわけだ。冷凍されて鮮度を保てたことがよかったのだろう。しかしそのため肝心なところの記憶がないので、この冒険談はこれだけ。

酒が進むにつれてぼら親父はろれつが回らなくなり、とうとう酩酊状態となり、妙な踊りをしていたが、やがて、沈んだ。

私は、残った酒を、「おれにも一杯くれや」と近づいてきた、亀の尾ナシじいにふるまった。彼が尾ナシと呼ばれているのは、もちろんしっぽがないからであるが、そのいきさつがまた面白い。酒のお礼に昔の話をしてくれた。

尾ナシが尾なしでなかったころ、彼は大きな川にすんでいた。尾ナシにとって人生は賭事（かけごと）につきた。彼がギャンブラーとして成功した若い頃はまだ水が農薬などで汚（けが）されていなかったから、多くの種類の水中動物が池や川に生息しており、またそれを餌にする水鳥もどこにもいた。よってギャンブルに適した水鳥同士の戦いがしょっちゅう起きていた。たいていおす鳥同士がめす鳥を奪い合うための戦いだったが、たまにはめす同士のおすの奪い合いもあった。ギャンブラーたちはどちらの鳥が勝つかを予想しあった。

そして尾ナシは、あらかじめ水鳥とぐるになって八百長をしくんだ。もちろんギャンブルでの儲けの分け前をあとで水鳥に配った。

じんきと呼ばれることとなるあるスッポンが尾ナシが勝ちすぎるので、何か裏があるのではないかと怪しんだ。なぜなら尾ナシは負けることはあったが、そういうときに限って掛け金は少額で、勝つときはたくさん掛けているという傾向に気づいたからだ。

尾ナシが大儲けしたある賭（かけ）のあと、じんきは相棒のすっぽんとで、メスの争奪戦に破れた白サギを襲い、相棒がその足の水かきに食いついた。痛がるサギにじんきは尋問した。「われはあのじょじょ（尾ナシの当時の名前）から金をもらって八百長をしよおったろうが。白状せえ」

「そんなことはしゃあせん、しゃあせん」そのサギは知らぬ存ぜぬをとおしたが、じんきの相棒はくいついた足をはなさなかった、彼もたいそうの掛け金を巻き上げられていたから。

「しらを切るなら、これでもをくらえ」じんきはサギのもう一方の足にかみついた。サギは「ぎゃっ」と叫ぶと、あわてて飛び上がった。そしてスッポンたちを落とそうと足を振った。スッポンたちは必死でし噛みついた。サギは二匹のスッポンがぶら下がっているの、すぐに疲れて落水した。そしてとうとうメス争奪戦でわざと負けたことを白状した。

じんきとその相棒はこのサギを連れてじょじょの家に行った。じょじょはすでに顛末（てんまつ）を見守っていたので、しらを切ることはしなかった。じんきはじょじょに落とし前をつけることを迫った。すなわちもうけた金をみんなに返すことと、亀賭博界のしきたりに従って、尾を詰めることであった。こうしてじょじょは金なし、尾なしになった。

スッポンのじんきはこのことにより亀仲間から崇められ神の亀すなわち「神亀（じんき）」と呼ばれるようになり、じょじょは「尾ナシ」と呼ばれるようになってみんなから笑いものにされた。

それでもギャンブルをやめられない尾ナシは、その川を去り、日本全国の川や湖水を巡りギャンブラーの人生を続けた。やがて、冬でも暖かいこの湖に来て、ひどく気に入ったので、そのままここで余生を過ごすことにしたということだ。といってもそれは戦前のことで、ずいぶん長い余生を過ごしてきたものだ。

酒をちびちびやりながら、そのような話を聞いていると私も酩酊状態になり、うとうとしているうちにボートの中で沈んでしまった。

変な夢を見た。ボートにじんきが近づいてきて「おれにもその酒をくれろ。おもしれえ話をしてやるから」と言うのだ。すっぽんにしては目が赤くぼくは「おまえはすっぽんじゃないね。目が赤い」と言うと「すっぽんの目は赤いのだ」と言いました。そんな話をしていると、こんどは土神様が赤い目をきらきら光らせながら泳いできて「その酒を飲ませろ」と言います。こちらは正真正銘の土神様だと思いました。「どじんさま、この酒は私がもう口をつけたので畏（おそ）れ多くて差し上げられません」と言うと、「ばかもん！」としかられました。次に寄ってきたのは何かわかりませんでした。やはり酒を欲しがり、断ると去っていきました。

あとで私は、自分は夢の中でもけちだなあと思いました。けちけちしないで酒を振舞ってやればよかったと思います、減るもんでもないし。

つづく